

国

語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、
左記の注意事項をよく読むこと。

注意事項

- 1、問題冊子は、23ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて、監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。

問題は次のページから始まります

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます)

なぜ自分はこの世に生まれ、なぜ生き続けているのか。もともと、この問いを考えるのは哲学の役割でした。哲学は、世界をわかりやすく解釈すること、**I**、生きる意味を教えること、という二つの使命を負っていました。**II**、社会の大きな変化により、哲学は二つの学問に乗っ取られてしまいました。

① 20世紀、哲学は生物学にその地位を譲り渡しました。それまで、人間はほかの生物とは異なる特別な存在であると考えられていました。自然を支配し、管理する権利を神から与えられ、神の姿に似せてつくられた存在だとされていたのです。それが、生物学の登場によって、人間もほかの生物と同じようにDNAという遺伝子によってつくられていることが明らかになりました。**III** 人間をつくるのも遺伝情報であり、その情報をいじれば、病気など、人間の抱えている問題は解決でき、身体や性格さえも意のままに変えられるという予測が成り立つようになったのです。

その予測は、まず栽培植物と家畜という形で現実になりました。今、地球の全陸地に占める牧草地、放牧地、農耕地の割合は36%に達しています。**IV** 地球上に生きている哺乳動物の9割以上は人間と家畜です。人間と、人間が手をかけてつくり上げた動物が地球上の哺乳類のほとんどを占めてしまった。今は海の魚にまで人間が手を加えています。このまま行くと、人間の手にかからない生命はなくなってしまうかもしれません。それほどまでに生命をつくり変えた人間は、さらに自分自身も遺伝子編集や遺伝子組み換えによってつくり変えようとしています。神経細胞の間をつなぐインパルス(電流)によって、記憶も思考もすべて解釈できる。③ 心も脳の中にある。生物学はそう断じたわけです。

こうして哲学を乗っ取った生物学は、やがて情報学に乗っ取られます。情報であるDNAを操作すれば、有機物であれ無機物であれ、あらゆるものをつくり出すことができます。生物も、遺伝的*アルゴリズムでできた情報の塊です。人間も同じ。遺伝的アルゴリズムを解釈すれば、いくらでも情報は書き換えることができます。情報として捉えれば、世界の在り方も

すべて数学的に解釈ができるわけです。こうして、哲学が人間を定義し、人間の生きる意味を考える時代は終わりました。

生物学を乗っ取った情報学は、人間を知能偏重へんちゅうに変えました。情報学が扱あつかうのは、人間がもつ二つの能力、知能と意識のうちの知能の部分だけです。大脳辺縁系へんえんけいが司つかさどる意識の部分は切り捨て、情報になる部分、つまり大脳新皮質しんびしつが司る知能だけで解決していかうというのが今の情報革命の中心理念だからです。AIも、知能だけを拡張したものであって、感情や意識の部分はもっていません。人間は、感情や意識を忘れ、知能に偏り始めたことで、本来、決してわかるはずのない「好き嫌い」や「共感」、「信頼」といった感情を、情報として「理解」しようとするようになりました。

かつて人間は、そんなことに悩む必要はなく、意識に従順であり続けられました。意識や感情は本来すごく曖昧あいまいなもので、波のように寄せたり引いたり、霧や雲のように消えたり現れたりします。「好き」という感情を細かな要素ぶんせきに分析ぶんししなさいといわれてもできるものではないでしょう。それは、知能でわかるものではなく、感じることだからです。犬や猫を飼っている人は、考えてみてください。ペットの犬をかわいいと思う気持ちは、いくら分析してもわかりません。自分に寄り寄ってくる犬の感情は、尻尾しっぽを振ったり吠えたりする様子を見れば感じとれますが、何がその感情を呼び起こしたのか明確に分析することは不可能です。もしかしたら人間の1000倍以上の嗅覚きゅうかくで、人間が無意識のうちに発している匂いを感じとってそれに反応しているのかもしれませんが、それはわかりません。確かなのは、お互いにそういう感情が湧いたという事実です。五感の異なる動物と100%わかり合おうというのは無理なことです。それでも、飼い主として一緒に暮らしていれば、彼らが何をしたいのか、わかることも多いですよ。曖昧なものを曖昧なままで了解し合うのが動物たち、特に異種間のコミュニケーションなのです。それで両者に不自由はありません。

④ こうしたペットとの関係を、かつて人間は人間同士でも結んできました。相手の心を明確に知ることはできないけれど、了解できるものはある。その了解できるものが自分と相手の間に横たわっているからこそ信頼関係が生まれます。信頼関係をつくるのは言葉ではありません。言葉は代替物だいたいぶつであって、信頼関係へのリアルな架け橋になるのは、それ以外の五感

の中、正しくは、五感を感じられる身体の中にあります。それを、言葉でうまく代替して空間を広げるのが人間的な社会のつくり方であって、その際、身体が感じた「曖昧なもの」は曖昧なままにしておいていいのです。

ぼくたちは、そういう世界にずっと生きてきました。そこで幸福やら喜びやらを抱き、一方で憎しみや嫉妬といった負の感情を、他者の助けも借りて解決してきた。それが人間の社会性だったわけです。

情報学に乗っ取られてから、人間はどんどん分析的になり、すべてを情報化しなくては気が済まなくなりました。人間は、感じたことで衝動づけられたり助け合ったりします。あるいは、食卓を囲んで楽しい思いをしたり、踊って興奮したりする。こうした感性の部分は情報化できません。たとえ情報に還元したところで、表面的な情報にしかならないでしょう。そして今、「わかるうとする」ことがわからないことにつながる」という矛盾が生じています。情報化することとは、わからないことを無視するということです。それは、隠されているものを捨てていく作業だからです。人間は、情報化することで逆にバカになってしまいました。

共感というのは「相手の気持ちがわかる」ことです。それを、「相手を理解すること」だと誤解している人たちが、多いように思います。相手を「理解」するのではなく、ただ「了解」することが、互いの信頼関係を育んだり、好きになったりする架け橋になるということがわからない。同調する能力があるにもかかわらず、それがお互いの信頼関係を育んだりすることもわからない。さらには、他者の自分に対する感情や、他者に対する自分の感情が、「好き」という言葉で表される感情に匹敵するものかどうかの判断できないのです。

⑦ その不安が、身近な人への過度なこだわりや要求となり、それがいじめや嫉妬、暴力につながっているのではないでしょう。実際には生み出されていない信頼を、一番近くにいる仲間^{かじょう}に過剰に求めるがゆえに起きている不幸な事件も多いのではないかと思います。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』による)

(注)

*アルゴリズム……ある特定の問題を解いたり、課題を解決したりするための計算手順や処理手順のこと。

問1 I IV に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

	I	II	III	IV
ア	しかし	そして	つまり	つまり
イ	しかし	つまり	そして	しかし
ウ	そして	つまり	しかし	しかし
エ	そして	しかし	つまり	そして
オ	そして	しかし	そして	つまり

問2 傍線部①「哲学は生物学にその地位を譲り渡しました」とあるが、そうなった理由として最も適当なものを次のア

～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然を支配し、管理する神の代行者であった人間の哲学的に重要な生きる意味が、無意味になったから。
- イ 人間もほかの生物と同じく遺伝子でできており、特別に生きる意味を考える必要がないと分かったから。
- ウ 哲学ではなく生物学で人間を解釈すると、生命や記憶や思考を思い通りに操作できるようになったから。
- エ 人間の生きる意味は、生物学で世界を解釈して人間の抱える問題を解決していくことだとわかったから。
- オ 人間は他の生物とは違って、DNAという遺伝子によってつくられてはいないことが明らかになったから。

問3 傍線部②「人間の手にかからない生命」とは、どのようなものをいうのですか、十五字以内で簡潔に説明しなさい。

問4 傍線部③「心も脳の中にある」とありますが、これはどういう意味ですか。その説明として最も適当なものを次の

ア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 理性や意識といった人間の精神的なものも、脳の神経細胞をつなぐインパルスによって生物学的に解釈することが可能となったという意味。

イ 心も脳の一部であることが20世紀の生物学によって声高こゝろだかに主張されるようになり、今世紀になってその考え方が定着したという意味。

ウ 地球上の哺乳動物の9割以上を作り変えてしまった今、人間はついに自らの心の部分に生物学の手を伸ばそうとしているという意味。

エ 20世紀の生物学によって遺伝的アルゴリズムが発見されて以来、人間の心もその一部にすぎないという見方が広がったという意味。

オ かつて人間は心だけが独り歩きし始めたようにも見えたが、20世紀の生物学の登場によって身体と精神は一体であることが証明されたという意味。

問5 傍線部④「こうしたペットとの関係」を説明したものととして、当てはまらないものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手がなぜそのような感情を抱いたのかを分析できないが、相手の抱いている感情に共感できるという関係。
- イ 相手の感情の細かな動きや揺れを正確に理解できないが、相手の思いをなんとなくは了解できるという関係。
- ウ 相手の感情や意志をいつも的確につかむことはできないが、こちらの意志を正確に読み取って反応する関係。
- エ 相手の感情を呼び起こした原因や理由は明確にできないが、相手の表出している感情がわかるという関係。
- オ 相手の感情の動きを細部まで分析できないが、それでもお互いに不自由は感じないでいられるという関係。

問6 傍線部⑤「人間的な社会のつくり方」とはどのような方法ですか。「曖昧」「信頼関係」という言葉を必ず使って、五十字以内で説明しなさい。

問7 傍線部⑥「わかれとうとすることがわからないことにつながる」とありますが、これはどういうことをいっているのですか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人はあまりにも分析的に相手の気持ちを「情報化」して理解しようとするあまり、感情や隠されているものを切り捨てることになってしまったということ。

イ 「曖昧なもの」を情報化しようという試みをすればするほど、それは一層、「曖昧なもの」としての性質を強めていってしまうということ。

ウ 憎しみや嫉妬という負の感情を情報化することで解消していくことを目指した結果、私たちの社会はまったく人間的なものではなくなくなってしまったということ。

エ 情報学によって我々がどんどん分析的な姿勢で社会を生きるようになっていったにもかかわらず、世の中には非分析的な「感性」がはびこっているということ。

オ 私たち人間が人と信頼関係を結んだり同調して共感したりすると、それは表面的な情報となって、お互い決して理解し合うことはできないということ。

問8 傍線部⑦「その不安」の原因となっていることとは何か、本文中の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問9 本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 20世紀は哲学が人間の生きる意味を考えてきたが、今は生物学がそのかわりになっている。
- イ 遺伝的アルゴリズムを解釈すれば、生物の情報はいくらでも書き換えることができる。
- ウ AIは知能を広げることしかできず、「好き嫌い」や「共感」といった感情は排除する。
- エ 人間は今まで憎しみや嫉妬といった負の感情を、周囲に助けられながら解決してきた。
- オ 互いの信頼関係を育んだり好きになったりすることで、相手を「了解」することができる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます)

「特急の汽車って、どうして窓が開かないの？」

帰郷の旅が近づいてくると、きまって次女が訴えるようにさういう。初めのうちは、「危険だからでしょう？ 特急はスピードを上げて走るから。うっかり窓を開けて首を出したり、手を出したりすれば、けがをするかもしれないし、風でよその人に迷惑をかけるかもしれないし……。」

などと教えていた妻も、それが毎度のことだから、いまではもう、「また、はじまった。」と笑うだけだ。すると、
「笑い事じゃないわ。私の身にもなつてごらんよ、お母さん。」

次女は口をとがらしてさういう。

二、三日前の午後いつになく早咲きした白木蓮の花を二階の窓から眺めていると、妻と次女とが庭で鳥籠の掃除をしながら、そんないつもの問答を繰り返すのがこえた。

子供たちは、春休みで、そろそろ七カ月ぶりで岩手の祖母のところへ顔を見せにいく旅の仕度に取り掛かっている。宿題もなく、それに今年は、三人ともそろって卒業も入学もなくて、ただ四月の進級を待つだけの気軽な春休みだから、一週間ほどの岩手の旅も存分に手足を伸ばして楽しむことが出来る。もちろん、次女もみんなと一緒に旅が出来るのは嬉しいのだが、ただ悩みの種は、往復の特急の窓が開かないことだ。それを思うと、次女はゆううつになつてしまふ。

「あれ、本当に困っちゃうんだなあ。風がないと駄目なのよ、私。窓を長いこと閉め切っていると、酸素がだんだんすくなくなってくるでしょう。そうすると、もう駄目なの。窒息するみたいに息苦しくなってくる。からだがぐったりして、気分が悪くなってくる。みんな窓が開かないせいなのよ。あれ、なんとかならないかしら。」

この子は、どういふものか乗物に弱くて、家では一番のはしやぎ屋なのに、なにか乗物に乗ると、
忽ち A になつて

しまう。それでも、近頃ちかごろは電車やバスやタクシーには馴なれてきたが、飛行機や特急列車は依然いぜんとしていけない。上と下はすこぶる元気で、食欲も旺盛おうせいなのに、この子ひとりはずっとして、なにか食べるとすぐ吐はいてしまう。とりわけ、特急でも半日がかりの帰郷の旅では、途中とちゆうから、まるで病人をひとり道連れにしているようなあんばいになる。③いちどなどは、汽車から降りても吐はき気が止まらなくて、休み一杯いっぱいを寝ねて過ぎたこともあった。医者に診みて貰もらうと、脱水症状だつすいしょうじょうを起おこしているといわれて、太いブドウ糖を注射された。

こんなことでは、せつかくの帰郷もお互たがいに気の重い旅になってしまう。なんとか次女を乗物酔よいから救う道はないものかと、絶えず心掛がけているのだが、いまだに有効な方法が見つからない。酔い止めの薬も、次女にはいっこうに効きき目がない。汽車に乗り込む時間や乗り込む前の食事も、いろいろに工夫してみたが、よい効果はあらわれなかった。どこかで、スルメをちいさく刻んだのをチューインガムのように絶えず噛かんでいると酔わないと聞いたので、それを袋ふくろに入れて持たせてみたが、やはり効き目がなかった。

昔からあるおまじないのたぐい——たとえば梅干を臍へそに当てておく、などということも、暗示にかけるつもりで試してみたが、これも無駄むだに終ってしまった。座席を二人分占領せんりやうしてぐったり横たわっている次女が、服の下から手を入れて腹のあたりをもぞもぞさせていたかと思うと、

「これ、返す。でも、気にしないで。」

と、まだ絆創膏ばんそうこうが十文字についている梅干を手のひらにのせて出したときは、私わたしはすっかりしよげてしまった。④

こんなことを何度も繰り返しているうちに、次女自身も我ながら情けなくて、ひそかに原因を探っていたのだらう、ついに自分で、乗物に酔うのはその乗物の窓が密閉されているからだということを見つけた。次女の乗物酔いの妙薬みょうやくは、次女の言葉によれば〈酸素〉であり、〈風〉なのである。次女の旅には、〈酸素〉と〈風〉が必要なのだ。

実際、次女はそのことを発見してから、電車やバスやタクシーには酔わなくなった。どれも窓が開くからである。とこ

るが、飛行機や特急列車は、そうはいかない。それで、次女はいまでも、帰郷の旅が近づくとたびに、

「特急はどうして窓が開かないの？」

とうらめしそうに訴えたり、

「あああ、また盛岡まで六時間の辛抱か。」

などと、うんざりしたりすることになる。

盛岡まで、というのには、私たちの町には特急は停車しないので、盛岡で普通列車に乗り換えなければならぬからである。盛岡で普通列車に乗り換えると、次女は早速窓際に陣取って窓を開け、存分に〈酸素〉と〈風〉を補給する。次女は、みるみる蘇る。頬には I が、目には II が戻ってくる。

「ああ、おなかが空いちやった。」

そういつて話す声にも、III が出てくる。

⑤ 次女は、ときどき窓から吹き込んでくる風に向って鼻を突き出し、目を細くして、じっとしている。私は、そのときくらい次女が気持よさそうな顔をするのを見たことがない。まるで、好きな人の膝の上に背中をまるくして、ごろごろと喉を鳴らしている仔猫のような顔をしている。

きのうの夕方、私は、*無精ぶしやうしていた頭があまりにもひどくなつたので、昔風に七三に分けた頭が好きなおふくろをびっくりさせないように、次女を連れていつもの理髪店へ出かけたが、そのとき、家の近くの川べりの道でチリ紙交換の車に出会った。

こんな商売にも縄張りというものがあるのかどうか、毎日この川べりの道を流していくのはおなじ車なのかどうか、私は家にも窓からのぞいて見たことがないからわからないが、チリ紙交換でございと触れてくる声や節回しを聞いてい

ると、同業入り混じって三人や四人ではないことがわかる。

ほそほそ声のささやき型。浪曲調。〈区役所からのお知らせ〉風——さまざまだが、私と次女が会った車は、声といい節回しといい、岩手の町の駅のアナウンスとそっくりであった。それで私は、その車とすれ違ってから次女にそういつてみた。

「……そういえば、似てるね。」

と、次女はちよつと耳を澄ましてからいった。

それきり、次女は黙って歩いていたが、やがて、ねえ、お父さん、といった。

「日本には、窓が開く汽車ってないの？」

「それはあるよ。」と私は答えた。「あるけど、そんな汽車は各駅停車ののろくさい汽車だよ。」

「のろくさくても、上野からその汽車に乗れば、お祖母ちゃんとこまでゆける？」

「ゆけないね、途中で何度か乗り継ぎをしないと。お父さんが学生のころは青森行の普通列車が何本もあったんだけど、いまは一本もなくなつた。でもね、各駅停車を乗り継いでいくと、時間ばかりじゃなくお金もかかるよ。途中で一と晩か二晩、旅館に泊らないといけないから。それに、食事だってそれだけ余計にしくちやならないし。」

次女はちよつと黙っていたが、

「私のお小遣い、来年の春までは貰わないってことにしても、足りないかなあ。」

と、独り言のようにそういった。

そのとき、私は正直いって、ちよつと胸を突かれたような思いがした。次女の悩みがそれほど深刻なものになっているとは思ひもしなかつたからである。次女の小遣いは、月々わずか三百円だが、それをそっくり一年分諦めてしまうというのは、子供にとっては容易ならぬことではないだろうか。

ゆうべ、私は、仕事を手につかぬままに、次女が憧れている〈窓の開く汽車の旅〉の思い出に耽った。私は、受験生時代から二度目の学生生活の前半ごろまで、窓の開く普通列車にしか乗ったことがなかった。妻を初めて郷里へ連れ帰ったときも、それから何年か後に都落ちをしたときも、夜行の普通列車であった。その翌年の春、再起を志して単身上京したときも、やはり夜行の普通列車であった。

真夜中に、どこかのちいさな駅で、ごとりと停まる。浅い眠りから醒めて窓を上げてみると、郷里ではまだ遠かった春が微風に乗って流れ込んでくることがあった。誰もいないホームの柵の外から枝をひろげている桜が満開で、夜明けにはまだ大分間があるというのに、勿体ないほど花を散らせているのを見たこともある。

また、いつかの春の夜、どこかの駅から乗り込んできて私の前の座席に着いた中年の女の人が、窓を上げると、外のホームには、下は五つぐらいの男の子から上は小学校六年生ぐらいの女の子まで、おなじ兄弟姉妹らしい五、六人の子供らが出て、「父ちゃんに、からだに気をつけてってな。」「母ちゃんも風邪ひかねよに。」などと口々にいい、母親も、「あいあい、盆には父ちゃんと帰ってくつから。みんな喧嘩しねよに留守をしてれや。」と答え、発車のベルが鳴ると、突然、*茶目な男の子が指揮棒を振る真似をして、子供らは低い声で〈螢の光〉を合唱しはじめた。

母親はびっくりして笑い出し、つぎにはあわて気味に、「やめれ。やめれつたら。」と子供らを軽くぶつ真似をしているうちに汽車が走り出し、ホームの灯が流れ去って外が暗闇になると、母親はちいさく舌打ちして窓を閉めたが、不意に、その窓ガラスに額を強く押し当てて、すすり泣きをはじめた。

あの夜の子供らの〈螢の光〉と、母親の額が窓ガラスに立てたごつつという鈍い音は、まだ私の耳のなかにある。

今年の春は、窓の開く夜行列車を乗り継いで帰ろうか？ 次女と一緒に、仔猫のような顔をして窓から春の匂いを嗅ぎながら……。

(注)

*無精していた……めんどくさがって放っておいた。

*茶目……無邪気で子供っぽいいたずらをする事。

問1 傍線部①「また、はじまった」とあるが、この時の母の心情として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記

号で答えなさい。

ア 窓を開けていけないのかと何度も尋ねてくる娘に、いい加減にしてほしいといらだっている。

イ 窓のことばかり気にする娘を、違うことにも興味をもってもらいたいと思っている。

ウ 窓を何度も開けようとする娘を、心に何か不安を抱えているのではないかと心配している。

エ 窓が開かないことをいくら説明しても納得しない娘に、少しあきれ気味になっている。

オ 窓に関して例年と同じ質問を繰り返す娘を見て、帰省の時期が迫ったことに気づいている。

問2 傍線部②「口をとがらして」、③「あんばいになる」の本文中における意味として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

② 「口をとがらして」

ア 申しわけなさそうな様子で

イ 悲しそうな様子で

ウ 不満そうな様子で

エ 残念そうな様子で

オ おかしそうな様子で

③ 「あんばいになる」

ア 気分になる

イ 状態になる

ウ 関係になる

エ つもりになる

オ つらさになる

問3 本文中の空らん A にあてはまる慣用句として、最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 青菜に塩

イ 水を得た魚

ウ 二階から目薬

エ 泣きつ面に蜂 つら はち

オ 身から出たさび

問4 傍線部④「私はすっかりしよげてしまった」とありますが、それはなぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問5 空らん I く III に入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えな

さい。

ア I 潤い うるお II 赤み III 張り

イ I 張り かがや II 輝き かがや III 赤み

ウ I 輝き かがや II 潤い うるお III 赤み

エ I 赤み かがや II 輝き かがや III 張り

オ I 輝き かがや II 張り III 潤い うるお

問6 傍線部⑤「次女は、ときどき窓から吹き込んでくる風に向って鼻を突き出し、目を細くして、じっとしている」と

あるが、このときの次女の説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 少しでも多くの風を自分の体内に取り入れて、必死に我慢している。

イ 自分の体に起こっている変化を察知して、環境に敏感びんかんになっている。

ウ 警戒心を解いて心も体もくつろがせて、風の心地よさを感じている。

エ 長時間の苦痛に耐え抜ぬいた自分をなぐさめて、他の家族に甘えている。

オ 帰省先に到着する期待感の高まりをおさえて、気持ちを整えている。

問7 傍線部⑥「次女は黙って歩いてた」とありますが、この時の次女の心情の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 岩手の町の駅のアナウンスを思い起こさせる父の話から、列車の旅の苦しさを思い起こし、それを回避する手立ではないものかと思いをめぐらせている。

イ チリ紙交換の車の声や節回しがさまざまであるという父の気楽な話を聞いて、我が身に迫った旅の苦痛は父にとつては他人事ではないことに腹を立てている。

ウ 普段なら気にも止めない商売について根柢を示しながら考察を展開する父の話に興味深く思い、父の意見は適当と言えるのか、自分なりに検討しようとしている。

エ 岩手の町のアナウンスを話題にした父が、列車の長旅を控えた自分を気づかっていることを感じ取り、旅に関する自分の計画を話してみようと考えている。

オ チリ紙交換のアナウンスに気を取られている父の様子を見て、今度の旅を中止することをお願いするのは今しかないという思いから、言い出すタイミングを探っている。

問8 傍線部⑦「ちょっと胸を突かれたような思いがした」とありますが、それはなぜですか。五十字以内で具体的に説明しなさい。

問9 傍線部⑧「不意に、その窓ガラスに額を強く押し当てて、すすり泣きをはじめた」とあるが、この時の母親の様子を説明したものととして、最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 子供たちが、母親には内緒で別れに際して歌を歌う練習をしていたことに気づき、子供たちの思いやりを打たれている。

イ 子供たちが、急に歌を歌い始めたことに最初は驚いたが、冷静に考えると他の乗客に迷惑をかけたことで悲しくなっている。

ウ 子供たちが、寂しさを表に出さずに両親を気づかう様子を見て、子供を置いて長期間離れるつらさがこみあげてきている。

エ 子供たちは、本当は母との別れがづらいのに、内心のさみしさをこらえて歌を歌って応援してくれたのを大変喜んでいいる。

オ 幼い子供たちを置き、母親が自ら出かせぎに行かねばならない貧しさが、周囲の乗客に知れてしまい、とても恥ずかしがっている。

問10 この話を讀んだあとに、先生が本文に書かれている内容について生徒同士で話し合いを行わせた。生徒A・B・C・

D・E・Fさんの会話を讀んで、本文の内容と合致する人の組み合わせとして適当なものを次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

Aさん 三人の子どもたちにとって、今年は時間に余裕がある春休みで、家族で一緒に旅が出来ることを楽しみにしていることがわかるね。

Bさん 汽車の旅をきっかけとして、ふだんから仔猫のような顔で甘えてくる娘が、まるで病人のように変わっていき姿を間近で見ている父親の心配がひしひしと伝わってくるね。

Cさん はじめは各駅停車で旅することに反対していた父親が、娘に強く説得されて考えを変える様子に、父親のやさしさを感じました。

Dさん 次女が憧^{あこが}れている普通列車は、父親にとって忘れてしまいたくなるような苦い思い出がなく、娘に同じようなつらい思いをさせたくないと思っっている点が残りました。

Eさん 最後の二行を讀むと、父親としての「私」が自分の次女の思いに寄りそってあげられるように、今回は〈酸素〉と〈風〉を十分に感じられる旅をさせようと思う気持ちが伝わってくるね。

Fさん 「私」がかつて出会った母親のことを思い出し、幸せな各駅停車の旅の思い出を娘に作らせてあげたいとも思っているのではないかなあ。

ア Aさん・Bさん・Dさん

イ Aさん・Eさん・Fさん

ウ Bさん・Cさん・Dさん

カ オ エ
Cさん・Eさん・Fさん
Cさん・Dさん・Eさん
Bさん・Dさん・Eさん

三 次の傍線部のカタカナを漢字に書き改めなさい。

- ① 成績の向上にツトめる。
- ② 風や水の災害にソナえる。
- ③ 本当の美のわかる目のコえた人。
- ④ 行方不明者のアンピを気づかう。
- ⑤ 大自然は資源のホウコでもある。
- ⑥ 事態が思わぬ方向にキュウテンする。
- ⑦ 栄養のホキユウを心がける。
- ⑧ 平和の尊さをツウカンする。
- ⑨ 合格のロウホウが届いた。
- ⑩ 人それぞれにシヤクドが違う。



2021A1

↓ここにシールを貼ってください↓

国語 解答用紙

受験 番号						
名前						

問 1
二
問 9
問 8
問 7
問 6
問 4
問 3
問 1
一

問 2																			
②																			
③																			
問 3																			

⑩
⑦
④
①
三
問 9
問 8
問 5
問 4

⑧																				
⑨																				